

15-56 株式会社の歴史的意味

「Ⅲ 株式会社の形成。これによって——

1 生産規模の非常な拡張が行なわれ、そして個人資本には不可能だった企業が現われた。同時に、従来は政府企業だったこのような企業が会社企業になる。

2 それ自体として社会的生産様式の上に立っていて生産手段や労働力の社会的集積を前提している資本が、ここでは直接に、個人資本に対立する社会資本(直接に結合した諸個人の資本)の形態をとっており、このような資本の企業は個人企業に対立する社会企業として現われる。それは、資本主義的生産様式そのものの限界のなかでの、私的所有としての資本の廃止である。

3 現実に機能している資本家が他人の資本の単なる支配人、管理人に転化し、資本所有者は単なる所有者、単なる貨幣資本家に転化するという。……株式会社では、機能は資本所有から分離されており、したがってまた、労働も生産手段と剰余労働との所有からまったく分離されている。このような、資本主義的生産の最高の発展の結果こそは、資本が生産者たちの所有に、といってももはや個々別々の生産者たちの私有としてではなく、結合された生産者である彼らの所有としての、直接的社会所有としての所有に、再転化するための必然的な通過点なのである。それは、他面では、これまではまだ資本所有と結びついている再生産過程上のいっさいの機能が結合生産者たちの単なる機能に、社会的機能に、転化するための通過点なのである。……

これは、資本主義的生産様式そのもののなかでの資本主義的生産様式の廃止であり、したがってまた自分自身を解消する矛盾であって、この矛盾は、一見して明らかに、新たな生産形態への単なる通過点として現われるのである。このような矛盾として、それはまた現象にも現われる。それはいくつかの部面では独占を出現させ、しただってまた国家の干渉を呼び起こす。それは、新しい金融貴族を再生産し、企画屋や発起人や名目だけの役員姿をとった新しい種類の寄生虫を再生産し、会社の創立や株式発行や株式取引についての思惑と詐欺との全制度を再生産する。それは、私的所有による制御のない私的生産げある。

IV 株式制度——それは資本主義体制そのものの基礎の上での資本主義的な私的産業の廃止であって、それが拡大されて新たな生産部面をとらえて行くにつれて私的産業をなくして行くのであるが——この株式制度のことは別としても、信用は、個々の資本家に、または資本家とみなされる人々に、他人の資本や他人の所有にたいする、したがってまた他人の労働にたいする、ある範囲内では絶対的な支配力を与える。自分の資本にはなく社会的な資本にたいする支配力は、資本家に社会的労働にたいする支配力を与える。人が現実所有している、または所有していると世間が考える資本そのものは、ただ信用という上部建築のための基礎になるだけである。このことは、……562F5まで。」

注)最後の「資本主義的株式企業も、協同組合工場と同じに、資本主義的生産様式から結合生産様式への過渡形態とみなしてよいのであって、ただ、一方では対立が消極的に、他方では積極的に廃止されているだけである。」との表現の訳は適切ではないのではないのか。「資本主義的株式企業」は「対立が消極的に」も、「廃止され」てはいない。注)について、28-4に重複掲載 (大月版『資本論』④ P556B4-557F5、557B6-1、559B11-560F4、560F9-561F3、561B8-562F5)